
オストリア雑貨店へようこそ

千春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オストリア雑貨店へようこそ

【Nコード】

N7358X

【作者名】

千春

【あらすじ】

とあるファンタジーな世界で雑貨店を営む青年・クリストファーの日々を描いた物語。

チュンチュンと鳥が朝日の中で鳴く頃俺は布団の中で目を覚ました。

春先の暖かな日差しの中でありながら少しだけ冷たい空気にもう少しだけ寝ていたいと感じ、今日はこのまま布団の中で過ごすと言う魅力溢れる考えも頭の中に浮かぶがここはどうか押さえ込み上半身を持ち上げる。

「今日の予定は何だったか」

最近一人暮らしに慣れてきたからか段々と独り言が増えてきた。前までは師匠のところに住み込みで従事していたからこんな事も無かったのだが。

一人立ちを命じられ、ここ、オストリアにやってきてからすでに一年がたった。最初の頃は周囲の商店の方々に受け入れられなかったが月一の商店街会合において自作の酒を振る舞い、一瓶一気飲みを披露してからと言うもの見事に受け入れられた。

ただし事あるごとに俺に一気飲みを求めてくるのは勘弁して欲しい。

起き上がり朝食を軽くとり身支度を整えると俺は自宅兼店舗から外に出て自分の店を見上げる。

そこに書かれているのは仲良くなった大工に作ってもらった自慢の看板、オストリア雑貨店の看板だ。

「今日も一日頑張りますかっ！」

俺はドアにかけられたパネルを裏返し開店中と書かれた面を表に

する。

俺の名前はクリストファー、王都オストリアにて錬金術を使った
雑貨店を営んでいる。

「ようクリスっ！ 実は……」

「酒なら売れませんかよ、アンナさんに売らない様に言われているので」

「マジかよ」

ある日の昼下がり、雑貨屋でノンビリと本を読んでいた俺のところにやってきたのは鍛冶屋を営んでいるグレンさんだ。最近年齢が四十を突破したはずなのだがその腕は筋肉に覆われており、そこからは衰えなど微塵も感じられない。

アンナさんというのはこの人の奥さんで、気が強く筋肉隆々のグレンさんが尻に敷かれるほどだ。もちろん力ではアンナさんに勝ち目があるはずが無いので、おそらくグレンさんの惚れた弱みと言うヤツだろう。二人が一緒にいると喧嘩しているようでも周りにいつも笑顔が絶えない、そんな夫婦なのだ。

「って今回はそうじゃないんだよ。良い話を持ってきたのさ」

「良い話？」

グレンさんからは酒以外の話を聞いた事が無かったので思わず驚いてしまった。

このグレンさんは俺がやった一瓶一気飲みを見て一番に気に入ってくれた人で、今でもかなりお世話になっている。たまに家にお邪魔させてもらって夕飯をご一緒させていただくこともたまにあるくらいだ。

「今度魔法学校が出来るってのは知ってるだろ？」

「ええ」

魔法と言うのは自身の持つマナと呼ばれるものを使って行うもので、才能がなければ出来ないとされている。今までは一人の師匠の下につき、そこで秘伝の技を教わると言うのが普通だったのだが、この度魔法学校と呼ばれる魔法の教育機関が作られることになったのだ。

なんでも「魔法を使える者を増やす」と言うことは国の発展につながる「らしい」。

俺も師匠の元について魔法の一種である錬金術を学んだ身であるがゆえにその利便性も知っているがその技術の難しさは存分に理解しているつもりだ。

実はマナと言うのは万人が持っているもので、その量と操ることが出来るかどうかで魔法を使えるかが決まってくる。量は使い続ければ増えるがやはり元が多いものほど有利なのは変わらない。マナの操作だって感覚の世界なので才能がいる。

俺の場合にはギリギリ自分で知覚できる程度だったが、師匠がとても優秀な方だったので一人前になる事が出来たにすぎない。

魔法と言うのは才能が全てなのだ。

だからこそ、その絶対数は少ない。ただしその威力は強大だ。たった一人の大魔導師によって一つの軍隊が足止めさせられた事だっ
てあるらしい。

おそらく今回の教育機関もそこら辺が目的なのだろう。隣国との関係悪化が囁かれている現在、戦力確保は重要な問題になっている。今はまだ開戦には踏み切っていないが、今のうちに優秀な人材を確保しておきたいのだろう。

魔法の学校を開くと言うことはそれだけの魔導師を国に集めるという事とイコールだ、そして普通なら引き籠もり、自身の技術を隠しながら一人に伝えていく魔法と言う技術が教わることの出来るチ

ヤンスも増えると言うこと。即ち、他国の未来の人材を減らす事にも繋がる。

長期的に見た他国の戦力の低下と自国の軍事力強化が目的となるのだろう。

もし自国に戻って魔法技術を伝えられるのが嫌ならば「オストリア国民に限る」とでも決めておけばオストリア国民に帰化せざるを得ない。

「なるべく関わりたくないなあ」

俺の本心である。

グレンさんに酒を与えることによってアンナさんに怒られるとはわけが違う。少し失敗したら、もし厄介なことに巻き込まれたら。それだけで比喻ではなく首が飛ぶ、平和でそれでいてノンビリと暮らしたい俺にとってあまり関わりたくない。

「魔法の媒体となる粉を用意してくれるだけで良いんだってよ？ それくらいならどうって事無いんだろ？」

「マジックパウダー？ 確かに簡単に用意できるものではあるけど……」

マジックパウダー、グレンさんのいう媒体と言うのは魔法を使う上で必要になってくるものことだ。これはエビルという木の葉を干して乾燥させ、それを粉末にしたところで魔力を一日中当てて続けることによって出来るモノ。

これは魔法の初心者がマナを感じることに出来ない時に使用するもので、これに込められた作成者のマナを使い魔法を使うことによってマナを擬似的に感じることに出来るようにするものだ。

熟練した魔導師だとこんなものを使用せずとも魔法を使うことが

出来る。

ちなみにマジックパウダーを作るのは錬金術の初歩中の初歩、これを冒険者に売って生計を立てている錬金術師も多い。

以上の説明から分かるとおり、錬金術と言うのは魔法の上位に分類される。

他にもソーサラーと呼ばれる戦略級の魔法を得意とする魔導師、ウィザードというゴーレムのような擬似的な生命を作り出す魔導師、ブリーストという魔法と神秘を融合させ傷を癒す魔導師もいる。

俺がなぜそんな錬金術師なのかと言うと、師匠が凄かったとしか言いようが無い。

「頼むよ、実はこの前お前を紹介してくれってとある方に言われちゃまってよ。どうにかお前の名前を出さなかったんだが、せめて品だけは言われちゃまって断れなかったんだ」

「いや、そのとある方は何で俺の事を知ってたんだ？」

自慢じゃないが俺はこの一年間目立たないように目立たないようにと商店街の人たち以外とはなるべく顔をあわせないようにして、冒険者相手の商売も目立たないように一般的な品を一般的な値段で一般的な質で取り扱っているのに。

「いや、この間酒を飲んだときに『俺の知り合いには腕の良いい錬金術師がいるんだ』って言っちゃまってよ」

「全部グレンさんのせいじゃないですか」

酒の席で俺の事をつい自慢してしまつたらしい。確かに魔導師の数も少ないし、さらに錬金術師のような上位となるとさらにその数を減らす。

だが学校を開くと言う以上その学校にだって教師として錬金術師

はいるだろう、それなのにわざわざ俺に頼む必要性がわからない。その事を質問してみると。

「何でも風邪ひいて寝込んでるらしくて最初の講義に媒体の数が足りないんだと」

「医者の不養生とはこの事だ」

正確には医者ではなく薬師だけだ。

俺達錬金術師はその職業上あらゆる薬剤に精通していなければならぬ。そのため冒険者にはマジックパウダーを、市民には薬を売るのが普通なのだ、と師匠が言っていた。もちろん俺もその信条を受け継いでいるので薬を作ることも出来る。

外に出れば食べられるか食べられないか、あの野草はどのような病に効くのか、あの毒草はどうすれば解毒できるのかなど復習も兼ねて様々なことを考えている。

おれくらい出来なければ錬金術師なんて無理なのだ。

「わかったよ。グレンさんの頼みだ、断ることは出来ない」

この一年間、ここにやってきてから一番お世話になった人が頼んでいるのに断る事が出来るはずも無く、俺はその依頼を受けることにした。

期限と個数を聞き、そこで嫌になって断ろうかとも一瞬考えた。

エビルの木というのは結構生えているもので、簡単に見付ける事が出来る。ちよつと葉が刺々しいので人が手を入れているところに生えては居ないが。

それを枝を何本か切り落としてく。低いところを切っていくのでこの木の生長にはあまり影響は及ぼさない。そもそも上のほうにある葉から太陽光を吸収するので下にある枝は邪魔なのだ。無駄な枝は切り落としたほうが成長が促進する。

まあ元々の成長力が高いのでそこまで気にせず一本丸ごと切り倒してしまつても問題は全然無いのだが、なんとなく可哀想な気がしてしまふのだ。

「まあ自己満足だよな」

自分の家の為に何本木が切られたのかは分からないし、あのオストリアを作る為に何本除去されたのかも分からない。

もしかしたら今までの人間の発展の中で邪魔だからと言う理由で全滅してしまつた植物もあるかもしれない。

さて、無事に目標の枚数も確保することが出来たし、次にコレを蒸す事になる。

「あー、釜の大きさはつと」

おお、一番でつかいのでギリギリか。

水を入れ、火を付けて沸騰させてから蒸す為に板を入れていく。そしてその上に茶葉を敷き詰めるのだが、余裕だろつと考えていた釜がギリギリだったので少し驚いた。

蓋をして近くで火が消えないように見張っていることにする。

今日はこの仕事に掛かりきりになるのでしょうがないから今日は雑貨屋はお休みだ。こういう時に店員でも雇ってあげれば良いのだが、どうにも魔導師でない一般人は雇いたくない。

しかし魔導師というのは時間が有れば研究をしたいという性質のやつばかりなので雇うことも出来ない。

「どうしたものが」

まあ今のままでも生活には困らないし大丈夫だろう。

それに今回のこの仕事の報酬は実はかなり破格なのだ、この作業が終れば後は日に当てる乾燥させるだけなのにも関わらず俺の月収三カ月分。これはちょっとリッチな気分が味わえそうだ。

新しい調合器具を買うと言つのも悪くないし、紙を買って自分の魔道書を書くというもの悪くはないかもしれない。夢は広がるどこまでも。

一晩中蒸すと葉は刺々しさが無くなりへなへなとした頼りないものになる。

それを外に出し、虫が食べないように木の皮で編んだ籠を被せて雨に気をつければ良いのだが……。

「どうすれば良いんだ」

いかんせん量が多い。少量ならば置く場所もあるのだが、ここは街中でさらに少し奥まったところにある。こんな大量の葉を日光に当てられるような所など存在しない。

魔法で一日でやってしまふという事も出来ないわけではないのだが、それだと質的に悪くなる。日光に当てるといふ行為は魔法的には自然が持っている魔力素と呼ばれるものを太陽光を受けながら葉が吸収する意味があると考えられているからだ。

とくに品質は問題にはされていなかったしそうしても良いのだが……しかしこれから魔法の道に進もうという子供達だ、最初くらい質の良い物を使わせてやりたいと言うのが人情と言うモノだろう。しょうがないのでザル一杯に入れられた葉とザル数个を重ねて持つて町の外に行く事にする。流石に持ち切れなかったのでグレンさんに頼んで運ぶのを手伝って貰う事にした。

街道から外れた場所でキャンプするくらいなら誰にも迷惑になら無いだろう。

木の板を地面に敷いてその上に蒸した葉を重ねないように敷き詰めていく、木の板が十数枚必要になったが無事に広げることが出来た。

「あーした天気になあれ」

街道脇に張ったテントの中で俺は無意味にそんな事を呟いた。

天気の日日光に三日間当て続けることにより葉を乾燥させ、そしてそれを粉末にし、マナを照射し続ければマジックパウダーは完成する。

「あのお、すみません」

「ん？」

乾燥始めてから最終日の三日目、それまで無事に天気に恵まれどうにかこの見張りの作業も終わる事が出来ると鼻歌を歌っていた時、まだ年若い女の声で話しかけられた。

今までは「何やってんだ？」という奇異の目で見られる事はあっても話しかけられるようなことは無かったのに。

俺に話しかけてきたのは短い黒髪の少女だった。いや、訂正しよう美少女だった。おそらく成長すれば世の男達を数人くらい侍らせる事が出来るだろうくらいの。

しかし見たところ気弱そうな所があるのでそんな事はしないだろうけど。

「何か？」

「えっと……」

今でもこうして俺に話しかけておいてオロオロとしている。どうやら人見知りのようだ、なら話しかけなければ良いのに。

彼女の目は俺と乾燥中の葉を行き来しており、俺のやっている事に興味を持っているようだった。

「俺のやってる事が気になる？」

一般人ならばここで「何をやっているのかわからない」と顔に書いてあるだろうが彼女は興味が有りそうな素振りをしている、即ち彼女は関係者だ。

しかも俺がやっている事を知っているという事は錬金術師志望かな？

「は、はい。私もく、薬作りに興味があるんです」

「なるほど」

前にも言ったとおり錬金術師は薬の調合も出来る。医者とは診断して錬金術師は薬を作る、俺の顧客にはいないが医者を抱えている錬金術師もこの世には存在するのだ。

まあ医者が薬を買うのは名の知れた錬金術師ばかりなので医者は俺には一生かかわりの無い職業の一つだろう。

俺はその間も葉の状態を確認していく、どうやら予定通り今日で帰れそうだ。帰ったら今日は休んで明日からマナを込めるのを始めることにしよう、どうにか期日までに間に合いそうだと安心した。

「こ、コレはエビルの葉ですよな？」

「そうだよ、今はマジックパウダーを作っているのさ」

「やっぱり」

そう言うと彼女は口許に握りこぶしを当てて考え事を始める。彼女は急に真面目な顔になると葉を籠の越しに眺め始めた。俺はあまり気にしないけど他の魔導師なら注意されてもおかしく無いぞ？

魔導師にとって自分の技術というのは人生そのものだ、恐らく魔法学校でも教えるのは基本的なこと、つまりはマナの出し方や基本的な薬物の知識などくらいだろう。それ以上の専門的な話となると本格的に弟子入りするしかない。

「あ、あのっ！」

考え事が終わったのか彼女は俺の方を向いて声をかけてきた。そんなに大声で言わなくても聞こえるのに、わざわざ大声を出されると耳が痛い。

「弟子にしてください」

「断る」

俺が考える素振りもせずに一瞬で返答すると彼女の目は涙を溜め始める。いや、コレくらいで泣いてたら後々きついぞ？俺なんて師匠に弟子入りを申し込んだら笑顔で死んで人生やり直せって言われたから。

なんであの人はあんなに楽しそうに俺の事を苛めてくるのだろう

か。でも何でそう言ったのかは理解できる。魔法なんかに興味を持ってしまったのがいけないのだ。

魔法の道に入るといふのは生半可な覚悟では通用しない、自分の一生を捨てるようなものなのだ。しかもそれでいて極めることなどどんな天才にも不可能な事という絶対的な難易度も存在する。

『錬金術、魔法と言い換えても良いが。これを極めるのには私があると100人がいて一万年かけたとしても無理だろうさ』

自信家でそれに見合う實力を持ち、天才という称号を持つ師匠が真面目な顔をして俺に語った。恐らくはあれは師匠なりに見つけた答えなのだろう。

『自分では不可能だ』と師匠ではありえないような答えが、だ。

一般的に言えば不毛で非生産的で意味の無い事が魔法の探求、そしてその探求に全てを捧げる錬金術師という職業はそれほどまでに無駄なのかもしれない。

俺はそのまま一言も発することも無くその場を後にしてテントに戻った。明日にはグレンさんが来て葉を運び込むのを手伝ってくれるだろう。

神様は俺の事が嫌いなのか？ 泣かせてしまった女の子と同席させるなんてイジメに違いない。今度教会にお布施しておこう。それくらいの余裕ならある、しすぎたら塩のみでの生活になるけど。

「弟子入りの件だったら断るよ」

「あう」

俺としてはこんな人の多いところでそういう話はしないで欲しいんだけどね、どこに耳や目があるか分からないんだから。まあこれだけ騒がしいと大声で会話しないうりとなり話ですら聞き取れないんだけど。

ちなみに俺の事を知っているのはこの商店街の人間のほかにも常連の冒険者くらいだ。しかし彼らは俺の事を外部に漏らしたりしない、なぜなら彼らが必要としているのは俺の作る道具、つまりはマジックパウダーなどのため、俺の機嫌を損ねるような事は出来ないのだ。損ねてしまえば俺から道具を買うことは出来なくなってしまう。俺から道具を買うにはその冒険者から紹介されなくてはならない。

つまりは俺の事を外部に漏らさないような信頼が必要なのだ。商売をやるのに信頼は欠かせませんぜ。

「じゃ、じゃあ売って欲しい道具が」

「んー、モノによるかな」

余りに高レベルなもの、例えばユニコーンの杖や万能薬といった希少価値が高いものや、グレートエーテルといった材料は簡単でも高度な技術が使われるものは無理だ。

ユニコーンの杖というのはユニコーンという聖獣とまで言われる動物の角を利用したもので、たとえ魔法を使うことが出来ない人で

もその杖を一振りすれば傷を癒すことが出来るプリーストも涙目の代物だ。

万能薬はあらゆる病に効くといわれるもので、ドラゴンの爪とこの大陸で一番高い山のスレッド火山の頂上で一年に一回咲くというスレッドの花の花びらが必要になる。

どちらも今では伝説級のモノだ。作ってくれと言われるような事は無いと思う。

「その、杖なんですが」

「杖だったらグレンさんって鍛冶屋に行きな。丁度良いのを仕立ててくれるよ」

結構華奢に見えるんだけどこう見えて杖で撲殺するような魔導師なのだろうか彼女は。ああ魔導師じゃなくて魔導師見習いか。まだ学校にすら入っていないんだし。

杖なんて使った覚えが無い。そもそも現代の杖なんて飾りだし。

「その、魔力特性付きの杖が欲しいんです」

「現在失われた技術です」

魔力特性というのはマナを効率的に使用する事の出来る特性の事を言う。ちよつと違うがマジックパウダーもその一つだ。あれは作成者のマナを使って持っているマナよりも多めに消費することにより普通に魔法を唱えるよりも魔法の威力が増す。

魔力特性付きの杖というのはその効果を断続的、かつ半永久的に受けられるようにする技術のことだ。古代文明の遺跡で極稀に発掘されることもあるらしいが高値で取引され、その技術は未だ研究中有る。

まあ例外もいるけど。

「そ、そうなんですか？」

「知らなかったのか」

「はい」

どうして誤解してしまったのかは分からないが、彼女は残念そうにしよんぼりしている。

「で、でも使ってる人を見ましたっ」

「へーどんな人？」

「女性で、杖を振り回しながら魔法を唱えて私の住んでいる町を救ってくれたんですっ！ 名前は聞けなかったんですけど『私は天才だからな！』って口癖の様に言っていました……どうしたんですか？ 机に肘を突いて項垂れてしまっつて」

「それは……」

それは俺の師匠だーっ！

何やってるのあの人！？ 俺のいる時にやった覚えが無いから多分この一年でやった事だろう。あの人自分の立場が分かっているのか！？ 色んな国で無銭飲食暴行泥棒公務執行妨害過剰防衛等々で指名手配くらってるっていうのに目立つなよっ！

まあ俺がそんな事言っても「天才だから許される」とか言うんだろっつな、真顔で。

そして俺の師匠が例外の一人で、本来研究対象であるはずの杖を使って悪行の限りを尽くし、各国で法律を犯しながら暴れまわっている人である。あの人は技術の発展というのに興味が無いのだろうか？ あの人が研究用の白衣を着ていたのは俺にモノを教える時だけだった気がする。

「私がどうしてそんなに強いのか聞いたら『天才だから』って言葉

の後に『この杖の性能もある』って教えてくれたんです。だから首都に行けば売ってるのかなって」

なるほどあの人が原因か。

「『だが私の才能が一番の理由だな』とも言っていました、だから私も……」

「そのセリフは忘れなさい」

きつとあの人の才能は誰にも真似できないようなものだから。

錬金術師でありながらソーサラー以上の魔法、ウィザード以上のゴーレム操作、ブリースト以上の蘇生魔法等々あの人は人間じゃない、化け物だ。俺はそう認識することにより今まで精神の平穩を保ってきたのだから。

あの才能の塊みたいな人を目標にするなて人生を無駄にするのと意味的には同じだ。

「君が目指すのは何？ その人みたいに（見た目は）ソーサラー？」

「わ、私は錬金術師ですつ。それで皆を助けてあげたい、薬を作りたいんですつ！」

「薬を作りたいなら薬師になれば良い、そっちのほうが簡単だよ」

錬金術にはマナという概念が入ってくる、ちよつとミスをするだけで効能が変わってしまうことだってありえるのだ。ならばマナが必要無い薬師であれば危険性が一つ減ることに繋がる。

「錬金術師ってのは言い換えれば研究者だ、金はドンドン減るのに全然入ってこない」

0と1の概念を研究することが錬金術師の本懐。

モノは0から生まれ1になりそして0になる、ならば0に至れることが出来れば全てを知ることが出来るのではないか、それが錬金術師の本当の研究対象だ。モノの原点、混沌、カオスとも言われるそれに近付くこと。天才ですらも諦めた究極。

そして錬金術師が忌避される一つの理由、滅びた古代文明の理由。それは錬金術師が0に近付きすぎてしまったがために全てが0になったのではないかという説。今となっては眉唾となってしまうこの説、古来までは信じられてきたものだ。

しかし俺は何となく思っている、その説が本当なんじゃないかと。そう考える俺だからこそ、彼女に言う言葉はもう俺の中で決まっている。本音と建前は違うけれど、言う言葉は師匠と全く同じ。

「死⁰んでからやり直¹せ」

もしかしたら俺は最悪の人間だろう、なんせこんな言葉をこんなに笑顔で言っているのだから。

彼女がこの言葉の意味に気が付けるのかは知らないが、気付けた時彼女は俺に何と言うのだろうか。

俺は食事をさっさと済ませるとその店から退散する事にした。

4 (後書き)

マジックパウダーは不思議な白い粉ではありませんが、あまり体内に摂取しないようにしてください。

無事に納品が確認され俺の元にお金が届けられた。今の俺の財布はこれまでに無いほどに潤っている。どれくらいかというところ。

「買ってしまった、新機材」

俺の工房の真ん中にドデンと置かれているのはただのどっかい鍋ではないので間違えないように。これは魔法の伝導性を考え、素材にこだわり、スレツフド火山の岩に含まれる鉄を使用して作られたものなのだっ！ 月収二カ月分相当也。

「たまらない、この黒々とした光沢がたまらない、たまらないったらたまらない」

まさかこんなものが入荷しているとは思わなかった。どうしてこうも今の俺はつきについているのだろうか、これ以上の幸せなど無い。

見るこの丸っこい形を、まさに職人が作った芸術じゃないか。こんなものが置いてある俺の工房はまさに楽園エデンに違いない。

「おっと俺としたことが、手袋をするのを忘れていたよ」

サツとコレを買うついでに買ってきたシルクの布を使って指紋のついてしまった表面を優しく撫でていく。

そして新たに輝きを取り戻す鍋、いや鍋だなんて下賤な呼び方はダメだ。これはそんじょそこらに置いてあるような代物ではない、もっと高貴な、そうそれこそごその貴族令嬢のようなものなのだ。それを『鍋』などという名詞で表現するなど万死に値する。これは

固有名詞をつけなくてはならないだろう。そう、この子だけの特別な名前を。

「そうだ、キャシーにしよう、君の名前はキャシーだ。分かったかいキャシー、ああ可愛いよキャシーっ！」

しかし俺の幸せな時間はそう長くは続かなかった。俺の視界の端に何か黒いものが映る。もちろんそれは油虫ではない、もっと大きな、そう人間ほどの物体が。

「し、失礼しましたっ！」

「待て、待ってくれ、待って下さいお願いしますっ！」

「……」

「……」

無言が俺の工房を支配する。いつもなら居心地の良い空間も今では修羅場同然の空気の痛さだ。もし浮気をしたらこの空気を味わうことになるんら俺は浮気などすることは無いだろう。それくらいにこの空気は痛い、そして目の前の少女の少し顰められた視線も痛い、突き刺さる視線とはこの事だ。

俺はもう二度と出来ないような綺麗な土下座を披露することになった。

そういえばこの黒髪の子とは何度も顔を合わせているが名前すら知らないな。まあ話すたびに俺が突き放しているんだからしょうがない事なのだが。

しかし今このタイミングで今までの行動が全て裏目に出てしまった。

どうしよう、このままいけばさっきの行動が商店街中どころかこ

の町全体に広がってしまう、そうやってしまえばこの国に俺の住む場所なんて存在しなくなってしまうじゃないかっ！

そして俺は国境を越えて隣国に移っていく事になる、しかしそこでも俺の平穩は続かない、きつと噂が人の歩く早さで広がりながら尾ひれ胸鰭ついでに背びれまでついていくに違いないんだ、そして俺はこの世界に住んでいる事が出来なくなりそして0になるしかなくなって。

「やった、師匠より先に0に到達できるぞ。ふふふふ」

「あ、あのう」

「なんでしょうお嬢様」

流石にそんな未来は嫌なので何としても回避したい。せめて師匠よりは後に逝きたい、出来るか知らないけど。あの人、人間じゃなくて化け物だし。

恐らくあの人のは時間が止まってるに違いない。

「で、弟子になれないのは分かりました」

おや、諦めちゃうのか。この美少女が弟子にならないのはちょっとどころじゃなく残念なんだけどしょうがない。

あの言葉はちょっととしたテストみたいだなモノなんだよね、あの言葉に対する自分なりの答えさえ見つけられれば僕としても弟子にとるのはやぶさかではない。

答えの無い問題ほど時間の掛かるものは無いし、あれを問いかけと理解するのも一苦労だ。というか俺は理解してなかったし。ムカついたから突っかかって行っただけだったし。

「ですので私を雇ってくださいっ！」

「……へ？」

「私をここで働かせてくださいっ！」

理解できなかつたら言い直された。いや、別に意味が分からなかったわけじゃないからね。

弟子になれ無いなら働かせてもらうつてことですか？ いや、でも一人で十分に回せてるし、この間みたいな依頼はちよつと忙しかつたけどそうそう有るものでも無いし。

そもそも収入的な問題で人を雇うなんて事出来るわけが……。

「お給料は要りません、私をここにおいてくださいっ！」

ああこれはアレか、どうにかして俺から技術を盗もうとしているのか。俺もちよつと位なら基礎を教えてもいいんだけど、半端な知識を身につけたら逆に学校で苦労することになる。

それに俺の持っている技術というのは俺の技術じゃない。正確には『俺だけ』の技術じゃない、師匠が、そしてそのまた師匠が自身の人生をかけて研究に研究を重ねて積み上げていった血と汗とその他イロイロな液体の集大成なのだ。そう簡単に盗ませるわけにも行かない。まあ簡単に盗める技術でも無いけど。それでも教えるなら正式な弟子が良い。

彼女の前ではそういうのを見せないようにするか、出来ないことは無いだろうけど魔法学校の日程ってまだ分からないからなあ。どうした事だろう。

「こうしよう、君が学校に入って最初の試験で十番代に入ることが出来たなら雇うことにする。もちろん一桁であっても大丈夫だ」

今回入学する魔導師見習い未満は100人以上、その中には貴族で抱えの魔導師から指導を受けたもの、それに魔導師の子もいる。彼らは学校の箔付けの為に呼ばれたに過ぎないが勉学には少しも手

を抜かないであろう。そのなかで上位になるには才能だけではなく、努力しなければ到底無理だ。

もし成績をキープできるような努力家であれば彼女を正式な弟子として迎え入れることにしよう。もしかしたらその頃には彼女は錬金術師以外を夢見るかもしれないがその時はその時だ。

「は、はいっ！　ありがとうございますっ！」

「よし、良い返事だ。それじゃあそろそろ名前を覚えてくれるかな、さすがに君のままじゃ嫌だろ？」

彼女は嬉しそうに笑顔で返事をする。それがどんなに難しい事か理解せずに。

なんだか俺って師匠に毒されてきているんだろっか、彼女をぬか喜びさせてそれを見て楽しんでるなんて。

「ミリアリーム・フォン・アヴェンティです。これからよろしくお願ひしますっ！」

「ああよろしく」

……………フォン？

5 (後書き)

約束をする時にはちゃんと相手の事を理解してからしよう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7358x/>

オストリア雑貨店へようこそ

2011年10月21日11時00分発行